

# 都市医師会長からの抱負

## 2期目を迎えて

札幌市医師会会長

松家 治道



本年6月、札幌市医師会長に再任されました。これまでの2年間ご支援、ご協力いただきました北海道医師会ならびに関係各位に深く感謝いたします。

いま、足下の日本では人口減少が招く消滅可能性都市問題、米国では中流層の消失、EUでは域内国家間差異の拡大、そして、中東地域を中心として生み出される暴力の嵐、その遠因ともなる非生産性、貧困が深刻な問題となりつつあります。

そうした中、衆議院選に大勝を果たした安倍政権は、成長戦略として規制緩和を推進し、医療においてもTPP参加、国家戦略特区の設定、混合診療の全面解禁、株式会社による医療参入など、営利産業化を目論んでいます。

日本の医療制度は「必要な時にいつでも医師から医療を十分に受けることができる状態を提供するインフラ」を目指すもので、非排除性と非競争性が高いものとされ、公共財と捉えるべきであり、市場原理による効率的な配分は期待できません。国民の医療への期待は、安心・安全で公平な医療を受けられる制度の維持であり、経済的利益のために医療を利用するのは、本末転倒です。

さて、団塊の世代が後期高齢者となる2025年には、多死社会を迎えることとなります。政府は、病床を120万床への減を目指し、これにより30万人の介護難民が出ると予想されております。この状態を少しでも緩和するには、在宅医療を中心とした、医療と介護の連携、地域包括ケアシステムの構築が重要となり、より一層多職種との連携強化に努め、互いが持つ情報と機能を効率的に活用し、保健・医療・福祉に取り組みなければなりません。

地域医療構想では、2次医療圏内で病床機能の調整が必要となります。一極集中という札幌市の特性はありますが、関係各位と十分な協議を行いたいと思います。

私ども札幌市医師会は、これまで以上に、北海道医師会および会員の方々とともに、市民の健康と日本の医療制度を守るべく活動してまいりたいと考えております。

## 2期目に向けて

千歳医師会会長

佐藤 貢



この度2期目の千歳医師会会長を拝命することとなりました。加えて、中央ブロックの推薦により道医の理事にも選任されて、身に余る光栄と感じております。

私たちの千歳医師会は設立52年目を迎え、約100名の会員で組織しています。理事会も多数は40～50代と若い会員が選任され、今後の医師会活動に大変心強く思っています。

千歳市は人口96,000人で少数ではありますが、人口増加している活気のある街です。日本最大の自衛隊駐屯地、新千歳空港を中心とした製造業、サービス業の企業が発展しています。全道で一番若い人口構成の街ではありますが、医師会活動についての問題は、他の医師会と同様であります。

- 1) 最大の問題は、休日、夜間の救急問題です。約40年間実施してきた在宅輪番制の維持が困難になっています。市当局と協力して早急に休日夜間救病センターの設立を目指しています。
- 2) 医師会組織の弱体化です。総会や行事を開催しても会員の参加は少数です。月に1度は研修会を実施して、知識向上を目指しています。新年会、ゴルフ大会等では親睦を深めています。

先日、砂川市立病院精神科医・内海久美子氏の講演を拝聴しました。演題は「社会全体で支える認知症ネットワーク」でした。高齢化社会に伴う認知症増加に対応して、

- 1) 早期診断
- 2) 在宅診療を基本とした社会への理解
- 3) 医療と介護の協力
- 4) サポーターの養成
- 5) かかりつけ医の協力
- 6) 高齢者手帳による情報の一元化

等の内容でした。地域で精力的に活動している内海先生の実績に、これからの高齢化社会への対応のヒントを発見したように思います。千歳医師会として、地域の医療充実のために努力していきます。

## 二期目の抱負

渡島医師会会長

小笠原 実



渡島医師会は、道南の1市・9町の広範囲な地域におよび、全道の郡市医師会の中では十勝医師会に次いで自治体構成の多い医師会です。わたしは、平成25年7月から第8代会長として会の運営を担ってきており、今回の定時総会で再選されて二期目の活動を任されました。

今までは救急医療体制の確保、医療・介護の連携、医師会活動を理解してもらうための市民健康講座の開催などが、年間事業の主な柱となっていました。わたしも就任当初からこれら事業の継続を掲げながら、さらに会員と家族、職員との親睦を深めるための文化講演会も行ってきました。

ただ、わたし自身25年間も地域医療に携わっていると、がん検診の受診率の伸び悩みと、がん死亡率が一向に減少しないという現実にも悩んでいます。特に、胃がん死亡数は年間約5万人で、35年以上の期間ほぼ同じ数で減少していないという事実です。そのため、がん予防も当医師会活動の柱としてやらねばという想いに強く駆られ、平成26年度から「中学生のピロリ菌検診」事業を開始しました。

初年度は渡島西部4町（松前、福島、知内、木古内）と七飯町の5つの自治体で行うことができました。いろいろな困難もありましたが、除菌に成功した生徒さんも数多く、毎年11月に函館市で行われる道南医学会に「医師会事業としての中学生に対するピロリ菌検診：第1報—地域の胃癌撲滅を目指して—」と題して発表をしたところ、高評価を得ました。

今年は、北斗市をはじめとして管内10のすべての自治体の中学校で4月から順次学校検診として行っています。

その一方で、9月26日には昨年の北斗市開催に次いで「がん予防町民フォーラム」を七飯町で開催し、がん検診の重要性とピロリ菌検診の意義を町民はじめ学校関係者らに広く訴えていく予定です。

最後に、中学生のピロリ菌検診を「学校健診」で実施するよう引き続き働きかけていくつもりですので、今後ともさらなるご指導とご支援をお願い申し上げます。

## 3期目に向けて

羊蹄医師会会長

皆川 幸範



高階前会長ご勇退の後、羊蹄医師会会長を引き受けて3期目に入りました。当初は1期のみつもりでしたが、法人変更問題で解散しなければならなくなり、2期目は羊蹄医師会解散・再設立を目的に全役員留任となり、再設立後もう1期引き受けることになりました。医師会活動の詳細について無知だった1・2期目は、無我夢中で先輩たちが築いてきた年間の行事・業務をこなすのが精一杯でした。

当医師会は羊蹄山を囲む7町村の医師たちで構成されていますが、交通の便が悪く、講演会をはじめ種々の会合の出席率は芳しくありません。町村民にとっても、小樽・札幌の2次医療圏への移動時間が60分以内のところはありません。運転のできないお年寄りの受診や通院は大変です。従って、管内で唯一総合的医療が可能な倶知安厚生病院への依存が高くなります。全盛期の半分位に減った厚生病院の医師数も、当医師会副会長である九津見院長のご努力で若手医師が増え、地元で根ざして活躍される先生たちに医師会に参加していただいております。町や開業の医師会の先生方にもご協力いただき、休日の救急外来の継続が可能となり、土曜日午後にも拡大できつつあります。冬の特殊な医療環境（外国人患者の増加）の改善はまだ十分ではありませんが、管内医療機関と協力して改善していきたいと思えます。医師増加が困難な現状で、少子高齢化の進行、地域包括ケアの推進、2次医療圏との連携、救急医療体制の維持、予防医療の推進など行政と協力して進めなければならない問題が山積しております。

当医師会の先生たちはもちろんのこと、後志ブロック医師会の諸先生、さらに北海道医師会の諸先輩のご協力・ご指導をお願いして、3期目の諸問題に取り組んでいきたいと考えております。今後ともよろしくお願い致します。

## 苫小牧市医師会長に就任して

苫小牧市医師会会長

沖 一郎



苫小牧市は道央圏の中核市として新千歳空港、苫小牧港などを有し道央物流の中心であり、王子製紙、日本製紙などの製紙業やトヨタ、いすゞなどの自動車関連、出光などの石油精製や天然ガスの産出によるエネルギー産業などを中心に発展しています。苫小牧市医師会は苫小牧市、白老町、厚真町、むかわ町、安平町の1市4町の医師会員で構成され約260人が所属しています。会員は東胆振はもとより、日高圏の住民の健康維持、疾病予防、治療、保健衛生や福祉の向上に努めています。

私が会長に最初に就任したのは平成19年です。この9年間はさまざまな事がありました。主な案件を振り返ってみます。平成19年は医師会館の改修、創立60周年事業、新夜間・休日急病センターの開設準備など。平成20年は新しい医師会館の完成、新夜間・休日急病センターの着工。平成21年は新夜間・休日急病センターの診療開始、穂別診療所の医師不在に対する苫小牧市医師会員の応援診療など。平成22、23年は東日本大震災発生に際し、苫小牧市医師会単独のJMATを組織し岩手県山田町に派遣し、また、釜石医師会、宮古医師会への慰問訪問を行いました。平成24年は看護学校三科体制を見直しし、進学コースを廃止。平成25年は会員病院の医師補充に対して、道や道医の協力のもと平常診療へ。平成26、27年は新しい保健センターの建設と運営体制の構築など。この9年間は振り返ってみると怒涛のような日々でした。毎回新しい問題に対して、会員の多大な努力とご理解のもと立ち向かうことができました。また道庁の皆様、北海道医師会の皆様、苫小牧市役所をはじめ、白老町役場、安平町役場、厚真町役場、むかわ町役場のお力添えをいただき会員、理事者と力を合わせた結果でした。

これからも新しい地域包括医療の中心として歯科医師会、薬剤師会、看護協会などの皆様とともに、この地域の課題に取り組んでいきたいと思っております。

## 4期目での取り組み

日高医師会会長

小松 幹志



平成21年に医師会の若返りを図りたいという趣旨で医師会長をお引き受けしてから、今年4期目もお引き受けすることになりました。日高はご存じの通り、えりも町、様似町、浦河町、新ひだか町、新冠町、日高町そして平取町の7町があり、総面積は和歌山県とほぼ同じくらいあります。そのため総会や講演会を開催してもなかなか会員の皆様と顔を合わせることも少なく、コミュニケーションが取りにくい状態でした。これを解決するために、日高医師会のホームページを立ち上げ、会員の先生方のみならず一般の方たちにも閲覧していただけるようにしております。また今年度より、もっとお互いの顔を見て話ができるようにと、医師会の移動例会を企画しております。先日、その第一回目としてえりも町に出向き、えりも町、様似町および浦河町の医師たちとの意見交換会をいたしました。やはり、電話やメールだけでは伝えきれなかったことを直接会って話す機会を設けることで、非常に有意義な時間を共有することができました。

日高管内では常勤医師数の減少や看護師不足は深刻で、病棟閉鎖、診療科休止ならびに無床診療所化をせざるを得ない医療機関が多くあります。限られた医療資源を有効に活用できるようにするために、施設間で患者情報の共有化を目指す「バーチャル総合病院構想」を新ひだか町で進めており、近々町内の医療機関ならびに介護・福祉施設との連携を構築しようとしております。この利用価値が認められると、町内だけでなく町外の医療機関との連携も可能になると考えております。医師会としましては、各町の町長、医療福祉担当ならびに病院長との意見交換を行うことで、このプロジェクトをバックアップして参りたいと思っております。

最後に4期目を任せていただいた医師会会員の皆様のご指導、ご鞭撻を仰ぎながら、よりよい医療・介護・福祉サービスを提供できるような組織作りをしていきたいと思っております。



## 医療提供体制についての思い

空知南部医師会会長

梶 良行



空知南部医師会は、単一の行政区分ではなく、栗山町、由仁町、長沼町、南幌町の4行政区分で活動する医師によって構成されているという特徴があります。4町の年齢構成を見ると、道内各町村と同様に少子高齢化を反映しており、高齢化率<sup>\*</sup>は、すでに21%を超えています。超高齢社会を迎えた4町における喫緊の課題は、一次救急の確保と終末期の看取りです。孤独死されたご遺体を検案するたび胸が締め付けられる思いに襲われます。今こそ医療と介護がしっかりと連携し、事を運ばねばなりません。人口減少に歯止めがかからない現状では、近い将来4町が独自の町立病院（栗山町は赤十字病院）の経営を支えることは極めて困難になるでしょう。私は4町が知恵と資金を出し合って、コアとなる一つの基幹病院を設立し、これを運営するのが良い方法だと考えます。そして診療所がサテライトとして機能し、入院が必要な患者は基幹病院へ送り、慢性期は診療所で診るというものです。基幹病院と診療所は風通し良く情報を共有して患者の診療にあたる。すべての疾病の治療を地域で完結することはできませんので、二次救急病院との緊密な連携も構築する必要があります。また、要介護者の受け入れ先もしっかり確保しなければなりません。情報は介護職とも共有することが大切です。各行政の長および関係各位と胸襟を開いて意見交換したいと思っています。

昨今、医師は訴訟を恐れ、自分の専門分野以外の疾病や外傷については尻込みする風潮が見られています。一方で権利ばかりを主張する患者もいます。モンスターバイシエントは「隙あらば訴えてやる」といった感じでしょうか。こういった状態は、医師のモチベーションを低下させ、患者を診るという臨床医の行動を萎縮させてしまいます。医師と患者が互いに信頼し合える関係づくりのため、医師会と地域住民との懇談会などを開催してみたいと考えています。

※高齢化率（65歳以上の高齢者の占める割合、21%以上を超高齢社会と定義する）

平成26年10月1日現在

栗山町；35%、由仁町；37%、南幌町；27%

平成26年9月1日現在

長沼町；32.5%

## 二期目に向けての抱負

夕張市医師会会長

中條 俊博



この度、（再選）を受けて二期目を迎えることとなりました。16年の長きにわたり医師会会長を勤められてきた築詰彰彦先生の後を受け、昨年1年間多くの先生方の助けを得ながらなんとかやってこられたのではと考えております。

前回の寄稿の際には、夕張市の歴史について紹介させていただいたので、今回は夕張市の医療に関する問題点に触れながら、抱負を語っていききたいと思います。

夕張市では人口減少が著しく、この10年で30%以上の減少を認め、平成25年には1万人を割り込み、現在では9,300人程度となっております。また、高齢化を迎えているといわれている日本の中でも、トップクラスの高齢化率48%超と超高齢化時代をすでに迎えています。

また15年後の平成40年には、80歳以上の割合が50%を超えるといった推計もあり、これは自治体として成り立つのかという不安と、さらに若者の都市への流出を考えると、このような時代の訪れが早まるのではと心配しております。

そのような環境の中で、われわれの目指すものとして支える側を強く、支えられる側を軽くするために「現役世代は元気に支えるよう→疾病予防」「高齢世代は支えられる側にならないよう→疾病予防、重症化防止」「後期高齢世代は安心して支えられるよう→重症化防止、在宅介護」を目指し、地域の医療に貢献できればと考えておりますが、このことも医療資源の限られている夕張市では「言うは易く行うは難し」で、なかなか思い通り進まないのが現状でございます。

現在、人口減少問題、市立診療所建て替え問題、コンパクトシティ構想による医療機関の存続問題等、まだまだ問題が山積み状態となっておりますが、市民の健康を守り、地域の安心を確保するために、もう一踏ん張りとして会長2期目の重責を感じつつ、医師会の運営に携わって行きたいと考えておりますので、今後とも道医の先生方のご指導ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

## 旭川の現況と3期目

旭川市医師会会長

山下 裕久



過去2期の間、道北ドクターヘリが順調に業績を伸ばし年間出勤数が500フライトを超え、今、十勝西部圏域での応需対応を調整中です。病院・診療所間医療情報連携ツールの「たいせつ安心医療ネット」も稼動1年4ヵ月で会員数565名、情報参照施設数124施設、登録患者数13,990名（平成27年6月30日現在）に達しました。小児科準夜帯の市立病院でのセンター化も行い、市内と近郊の看護師定着に向けて医師会看護専門学校高等課程（准看護師科）を増員しました。すべて会員のご協力あってのことですが、3期目はこれらの維持・継続に加えて地域医療構想の難題が待っています。

さて、今期当医師会は選挙制度を改定してB会員の理事立候補要件を緩和し、その結果、B会員理事が増え、女性勤務医も執行部入りしました。

この新執行部発足直後に、堤 未果著書の『沈みゆく大国アメリカ＜逃げ切れ！日本の医療＞』を全会員に配りました。国民皆保険制度堅持の重要性を再共有したいとの思いです。

また、他都市で既に行われているのですが、市の関係部局と新執行部全員との懇談を行いました。従来は保健所を通じて連絡していましたが、在宅・介護・地域包括の役割増大を踏まえて福祉・介護・子育ての部局との連携を強化します。

8月末には「新しい医療事故調査制度に関する講演会」を催しました。制度の10月開始に向けて、水谷道医常任理事、Ai学会長、顧問弁護士に講演いただきました。幸い当医師会にAi学会員が3名在籍しています。事故の防止と対応力向上を目指したいと思います。

地域医療構想に向けては、9月に「病床機能をアピールする集い」を開催します。今まで以上に病院間・有床診療所・無床診療所の相互理解を深め、在宅・入院連携をよりスムーズにしたいとの思いです。加えて中旬には、厚労省地域医療課長補佐にご講演とともに地域を見ていただこうと計画しています。

旭川には市立・日赤・厚生・医療センター公的4病院に加え、医大もあり、人口比の医師数は全国有数です。しかし、医師数の伸びは国平均を下回り、都市別順位は低下しています。医療都市としての発展が期待される中、少子高齢化、医療費削減、TPPの行方など難問山積で先行き不透明ですが、医療機能の維持・連携を深め、地域の疲弊を防ぐための医師会の役割を考えます。

## 富良野圏域の医療を守る

富良野医師会会長

石澤 秀明



医師免許取得後35年を振り返ってみれば、医師として立派に生きてきたとは言えない私だが、現在、富良野医師会長の2期目を務めさせていただいている。過去の悪行の数々を消し去ることはできないが、医師会長として社会に何らかの貢献ができるとしたら、多少の償いにはなるのではないかと思っはいる。

富良野圏域の医療に関して、さまざまな問題があるのは言うまでもないが、第一には救急医療体制の確保だという認識を、富良野医師会前会長で、現在顧問をお願いしている高橋尚志先生と共有している。

富良野圏域では、平成21年4月から、従来の個別に医療機関が輪番で担当する一次救急医療体制を変更して、診療場所を富良野協会病院に一元化し、圏域の医師、あるいは協会病院に所属する医師が、交代で診療に当たる体制とした。併せて、いわゆるコンビニ受診自粛の呼びかけ、救急冊子「こどもの救急」の配布などを行い、一次救急医療受診者数の減少という結果を見ている。

第二の問題は、富良野圏域の医師数の減少、そして医師の高齢化ということである。一次救急医療の診療に従事する医師の確保すら難しくなるという医師不足の状況は、なんととしても回避したい。そういった思いから、富良野医師会として、富良野市に医学生に対する修学資金貸付制度の創設を提案し、平成26年度から、その制度が旭川医科大学の学生を対象としてスタートした。この制度の特徴は、富良野市内の医療機関で一定期間の臨床研修を受ければ、修学資金の返還が免除されることである。すでに、富良野出身の学生も含めて数名の学生がこの修学資金を受けてくれているのは、多少、明るい兆しだと考えているが、当然、楽観はできない。

多くの困難はあるけれども、あまり悲観的にならず、地域センター病院である富良野協会病院を中心とした圏域の医療の確保・充実のために、微力ながら貢献するというのが、私の2期目の抱負である。

## 上川北部医師会、この10年

上川北部医師会会長

吉田 肇



中村稔前会長から会長を譲られたとき、「坂田、岡崎の元気な若手と共に上川北部を頼む」と言われた。まず手がけたことは、半ば閉院が決まっていた国立療養所名寄病院を医師会立として存続させることで、中村前会長の時代に話が始まり、私の代に「名寄東病院」としてスタートするに至った。以来12年、現在は佐古和廣院長がしっかり運営にあたっている。中村前会長、士別地区をまとめ副会長として支えてくださった百瀬達夫先生も、もういらっしゃらない。そして、岡崎望先生の思いがけない、早すぎる旅立ちは本当に痛手だったが、士別、名寄で若手による新規開業もあり、医療レベルは保たれている。

名寄市を語る時、自衛隊、市立大学、上川北部の中核都市、医療機関の充実などのキーワードが使われる。自衛隊と大学によって人口減少にやや歯止めがかかり、若い人が周辺に比べて確かに多い。市立病院もヘリポートを設け、緊急医療体制を整えるなど、周辺の医療過疎を補うシステムを構築し、和泉裕一院長が自ら高速道路の早期着工を訴えている。また、高齢者が自宅で過ごし、看取りもできるよう、若い先生方が在宅診療に取り組んでいることも特筆すべきことである。

35年前に私が父のあとを継いで名寄に戻った頃はまだ「医者がいい時代」だった。今は「患者がいい時代」となり、上川北部においても医療が本来あるべき姿になりつつあると思う。酒を飲み、談論風発しながら親睦の場となっていたかつての医師会に比べると、地域連携を熱心に話し合う若い世代はまことに頼もしい。いつしか私は最年長となり、にこにこしながら笑って見守る立場になった。

自衛隊も含め、転勤族にとっての名寄はおおむね評判がいい。教育環境、豊かな自然、おいしい農作物、自然災害が少ないことに加えて必ず話題となるのが医療機関の充実である。「ずっと住んでいたい」と言われる。けれども「この寒さと雪さえなければ」と結んで去っていく。

## 2期目にむけて

根室市外三郡医師会会長

杉木 博幸



不肖私が2期目の会長職を務めさせていただくこととなりました。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

当地域は道内でも、医師・医療従事者の不足が非常に深刻な地域であります。限られたメンバーで有効な医療を展開するには、公的機関病院・開業医間の連携、多職種間の連携が重要であることは言うまでもありません。根室市では定期開催している医療連携の会を通じ、医師同士や医療機関間、あるいは多職種間の顔の見える良好な関係が年々構築されてきており、一丸となって患者の治療にあたるという意識が成就されつつあります。また医療従事者の確保には、各医療機関、各自治体の皆様の並々ならぬ不断の努力がなされており、かろうじて医療が維持されています。しかしながら、若年人口の減少や都会への人口シフトの波は非常に厳しく、いつ地方医療が崩壊してもおかしくない状況です。

道医師会の長瀬会長が取り組んでおられます青少年育成事業が、平成25年10月に中標津町で開催され、医師不足の問題はまさに地域の子供たちへの教育の問題でもあると認識をいたしました。そこで当医師会としても積極的に同事業に取り組もうと、平成27年2月に医療体験や医師の講話を聴いていただく「お医者さんの仕事を知ろう」を市立根室病院で開催し、多くの小中学生に参加していただきました。この事業を通じて、将来この地域を担う医師、医療従事者が一人でも多く誕生してくれることを切に願う次第です。

少子化対策を担う産科医療については、町立中標津・町立別海両病院で分娩ができる状況にあります。産科医療体制が集約化される中、産科医を確保し、地域で安心して出産ができる機能を維持されている両病院の地域への貢献度は、計り知れません。ALSO、BLSOコースの毎年の開催など、関係医療機関の皆様のご尽力に心からの敬意を表します。